

CONTENTS

地域会だより _____ 1

連載【隔月 全6回】大阪建築家ものがたり
第2回 - 大阪府立中之島図書館 - _____ 2
倉方 俊輔

愛知発：行政ワーキンググループ
新しい地域会の活動として、
タウンアーキテクトを目指して _____ 4
吉元 学

Report
スイスのコンペ・プロポーザル事情の紹介や
建築家が置かれた状況について _____ 6
早矢仕 アレマン 耕平

私のとっておき 20
ぐい呑みと花入とARCHITECT _____ 7
高嶋 繁男

自作自演 250
商業と宿泊の新業態 _____ 7
高井 宏之

保存情報 ~番外編~
登録有形文化財：赤祖父円筒分水槽 _____ 8
浅井 裕雄

編集後記 _____ 8
廣瀬 高保・生田 京子

三重発
聴竹居を訪ねて _____ 9
出口 基樹

地域会だより 今後の予定

- JIA東海支部
・9/2 役員会
- JIA静岡地域会
・8/4 静岡地域会拡大役員会の開催 (WEB同時開催)
- JIA愛知地域会
・8/5 暑気払い ラグナスイート名古屋
・8/27・28 展示設営@穂の国芸術劇場PLATアートスペース
- JIA岐阜地域会
・8/18 役員会
・8/27 JIAの窓① 開催
- JIA三重地域会
・8/5 第3回役員会、第2回例会
会員研修会：講師 諺口志保 氏
「私の“まち”への関わり方—記録する、活用する、共感する—」

Bulletin Board

応募要項

第9回 JIA東海住宅建築賞2022

対象・応募方法「第9回 JIA東海住宅建築賞2022」webページにてご確認ください。
<http://www.tokaiarchiprize.jp>

- 応募作品提出期限 / 2022年8月31日(水)
※持参の場合は、9:30~17:00の時間内(土日祝日は除く)、郵送の場合は当日消印有効
- 応募料金 / JIA会員1点につき1万5千円:(会員以外1点につき3万円)
※応募者は公開審査後に無料懇談会に参加できます。
また、記録本を1作品につき一冊進呈いたします。
- 1次審査 / 2022年9月10日(土)※審査は対面とzoomの併用による公開審査
- 2次審査 / 現地審査とする。2022年10月8日(土)9日(日)
※現地及び最終審査時に設計者に質疑応答がある
- 最終審査 / 審査および入賞発表 2022年10月9日(日)(入賞者は要出席)
※審査結果はHP掲載及び応募者へ記録本の進呈にて通知する。
※新型コロナウイルスの状況により変更になることがあります。
- 応募・お問い合わせ / 主催：(公社)日本建築家協会東海支部事務局
〒460-0008名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5F
<http://www.jia-tokai-aichi.org/> Email: shibu@jia-tokai.org



応募要項

第38回 JIA東海支部設計競技

「しごと」と生きる家

対象・応募方法「第38回 JIA東海支部設計競技」webページにてご確認ください。
<http://www.jia-tokai.org/competition/top.htm>

- 応募締切 / 2022年10月14日(金) 郵送の場合は当日消印有効
- 1次審査 / 2022年10月30日(日)※1次審査通過者には11月上旬に通知予定。
- 2次公開審査会・表彰式・記念講演会 / 2022年11月26日(土)
※その他 詳細については、11月上旬にWebサイトにて公表予定。
※新型コロナウイルス感染拡大の状況により、リモート審査になる可能性があります。
- 応募・お問い合わせ / 主催：(公社)日本建築家協会東海支部事務局
〒460-0008名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5F
<http://www.jia-tokai-aichi.org/> Email: shibu@jia-tokai.org



表紙

街で見かけた風景 ⑤

「時のながれ」

流れのスピードが違えばそこには「渦」が生まれる。政治家の死後30年近く残された看板が撤去され、シーシャカフェなるものが新しくオープンした。

春日 一幸(1910年-1989年)政治家 左側の写真は2022年現在のもの。右側の写真は2017年のもの。



吉元 学 (JIA愛知)
ワークキューブ/愛知淑徳大学

名古屋と大阪をつくった建築家

名古屋に大きな足跡を残した建築家が、鈴木禎次である。1870年に生まれ、1896年に帝国大学工科大学造家学科を卒業した。大学院に1年ほど籍を置いた後、三井に就職して設計の経験を積み、1903年から約3年半の留学を経て、1906年に名古屋高等工業学校（現・名古屋工業大学）の教授となった。建築科長として多くの後進を育て、設計者としても活躍して、名古屋に建築家の系譜を打ち立てた。

大阪で同様の位置を占める人物が、野口孫市である。生まれは1869年と鈴木よりも1年早い。帝国大学工科大学造家学科を卒業したのは1894年なので、2年先輩にあたる。卒業後は大学院に進学し、1896年に通信省に入った後、1899年に住友本店臨時建築部の初代技師長に就任した。これが後の住友宮繕、長谷部竹腰建築事務所を経て、第二次世界大戦後の日建設計に続く組織となる。アカデミーでなく、実業の世界における建築の教室であることが大阪らしい。鈴木も野口も、東京ではない場所に本格的な西洋建築を築き、その完成度と人格を通

じて続く系譜を確立したことが共通している。

古典主義の存在感

大阪府立中之島図書館は、野口が住友家に招かれた後、約1年半の欧米視察を終え、最初に手がけた仕事の一つだ。建っているのは大阪・中之島。名前の通り、大阪を流れる旧淀川がここで二手に分かれる川の中にある島である。

建物は1904年に大阪図書館として開館し、2年後に大阪府立図書館と改称された。1922年には左右の部分を増築して、現在の姿が成立した。1974年に国の重要文化財に指定され、また他の府立図書館との関係で、大阪府立中之島図書館と呼ばれるようになった。現役の図書館として、働く人々の多い中之島エリアで重宝されている。

中之島図書館に威厳が感じられるのは、均整がとれているからだ。クラシックな素材を、基本に忠実にまとも上げている。全体が左右対称で、中央の玄関が最も堂々としているのが分かるだろう。三角形の屋根を4本の柱が持ち上げている。こうした柱の形は、紀元前5世紀頃の古

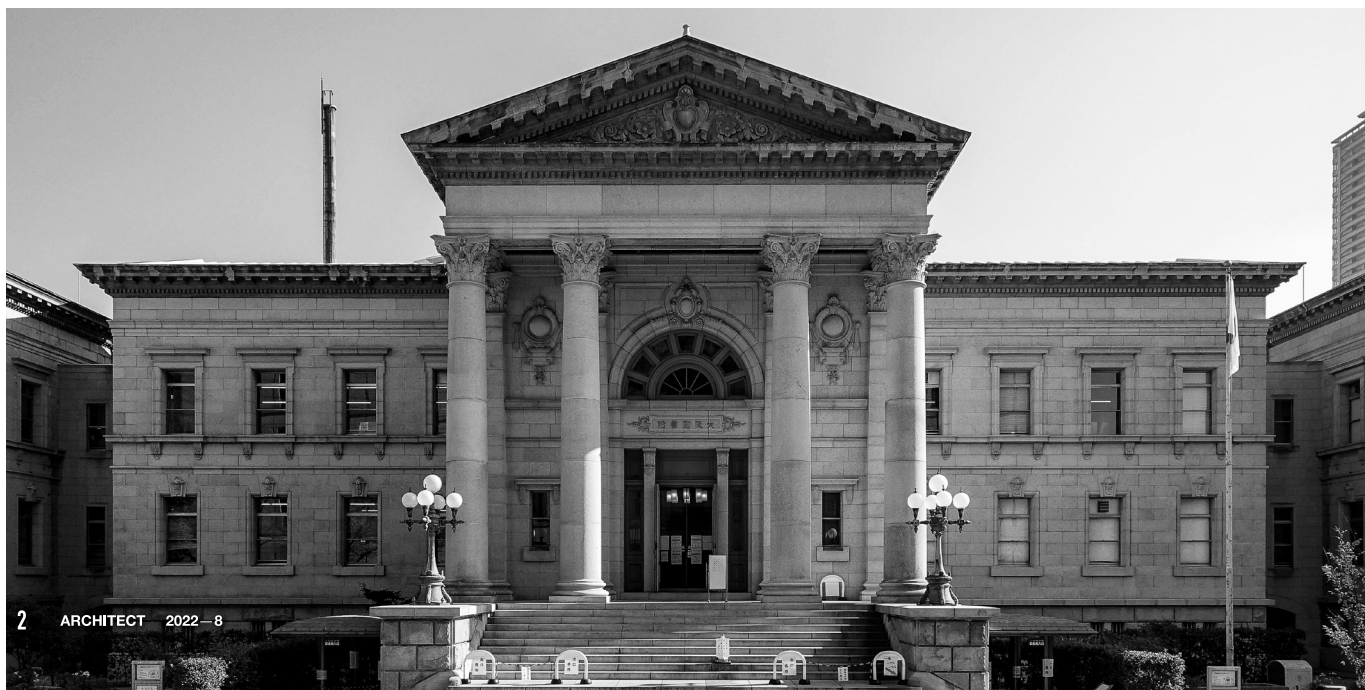
代ギリシアで使われ始めた。その上の三角形も古典的な素材である。古代ギリシアの神殿の正面を引き締めている形であり、ペディメントと呼ばれる。

もしこの柱がもっと細かったり、ペディメントが重々しかったりしたら、どうだろうか。一時は目を引くかもしれない。でも、ずっとあるものとしては不安感が拭えないだろう。その逆だったら、今度は野暮たくて、しばらくすると意識の視界の外に消えてしまいそうだ。

建築が存在感を放ち続けるというのは、なかなか容易なことではない。中之島図書館の揺るがなさは、古典的な形を使うだけでは生まれない。素材の巧みな組み合わせが、そう感じさせるのである。

「古典」という言葉は、建築界では一般に、古代ギリシアと古代ローマのものに対して用いられる。それらをお手本としたものを「古典主義」と呼ぶ。古代ローマの建築は、古代ギリシア建築の要素を引き継ぎながら、その使い勝手を高めた。

大きかったのは、アーチとの組み合わせだ。アーチは構造を受け持つ壁に、出入口などをあける。古代ギリシア建築が柱と梁の構造を洗練させてできた形であ



るのとは本来、関係ないのだが、古代ローマは二つのデザインを融合させ、さまざまな種類の建物に美しい見た目を与えることに成功した。

中之島図書館は、こうした古典主義の系譜を継いでいる。では、柱・梁とアーチの形は、どのように組み合わせられているのだろうか。

玄関にある4本の柱は、もし古代ギリシアの建築であれば基本的に等間隔で並ぶはずだが、ここでは真ん中の2本の幅が広がっている。この広い中央の柱間は、奥の壁にあるアーチ型に合うようにつくられている。左右2本ずつの柱が一セットになってペディメントを支え、その間に高いアーチの入り口が開く。手前と奥、柱と壁とが呼応することで、古代ローマの凱旋門のようなダイナミックさを生むよう、構成されているのである。

この記念碑的な存在感に、手前の階段も、腕を広げたような全体の形も寄与している。中之島図書館は、開国からわずか50年間で日本人が西洋の建築の王道である古典主義をここまで理解したことを示す記念碑といえる。それが残されていることが、全国的にも貴重なのだ。

玄関に入って正面には、2階吹き抜けのホールがある。ドームの天井がかかり、頂上でステンドグラスが光を放っている。階段は凝った装飾を持ち、左右対称に曲線を描いて上昇する形だ。このようなドームの形状や縦に伸びたスペース、外部とは一線を画したインテリアを、江戸時代までの日本人は知らなかった。西洋建築の醍醐味が体験できる空間である。

現代的な活用

これほどに立派な図書館は、当時の東京にもなかった。それがなぜ大阪に誕生したのか。正面から見えたアーチ窓の奥にある3階の記念室に、住友家15代当主・住友吉左衛門友純(ともいと)の銅板レリーフが飾られている。彼こそ莫大な建築費と図書購入費を大阪府に寄付し、建築家として住友に入社していた野口孫市や、増築部を担当した後進の日高胖に

腕を振るわせて、都市の誇りを建築に変えた人物にほかならない。

図書館としての利用に加え、近年は新たな活用も始まっている。中央のホールから右手に行った先には、西日本初のスモープロー専門店「スモープローキッチン・ナカノシマ」が入っている。スモープローとはデンマーク名物のオープンサンド。これをテーマに、フィッシュやミート、チーズなどの素材の取り合わせが、舌も目も楽しませてくれる。季節ごとに展開されるパフェをはじめとしたスイーツも人気だ。

部屋の中央にキッチンを新設したことで、席の間に適度な間隔が生まれた。高い天井も、外から見るより意外に大きな縦長窓も、クラシックな雰囲気。ヘルシーな食材、窓からの光や川沿いの緑を通して、都会の中にながら憩うことができる。

部屋の中央にキッチンを新設したことで、席の間に適度な間隔が生まれた。高い天井も、外から見るより意外に大きな縦長窓も、クラシックな雰囲気。ヘルシーな食材、窓からの光や川沿いの緑を通して、都会の中にながら憩うことができる。

古典、クラシックという言葉は、階級や品格という意味に通じる。中之島図書館は、商工業の発展と文化の記念碑として、大阪の中心部につくられた。かつての時代ならではの古典主義の格式と、現代的な開かれた健やかさの相乗効果を味わうことができる。

意匠と構造の礎を築く

鈴木禎次と野口孫市の共通性は、他にもある。名古屋・鶴舞公園に建つ噴水塔と奏楽堂は、鈴木禎次によるデザインを忠実に復元したものだ。もとの完成は1910年なので、中之島図書館の6年後にあたる。それぞれが名古屋と大阪という新天地に着任して5~6年後の作品となる。共通して見られるのは、単なる表層を超えた西洋建築の原理を理解し、それを応用することで、周辺に西洋的な秩序を生み出そうという姿勢だ。

鶴舞公園の噴水塔・奏楽堂は、古典主義の柱を、円形の平面に立ち上げていく。盛期ルネサンス期のプラマンテによるテンピエットが思い出される。名古屋の



発展を目指して開催された博覧会(第10回関西府県連合共進会)の会場であって、永遠を思わせる美しいプロポーションを通して、周囲の空間も近代的・西洋的なものに変貌させようとしている。

中之島図書館の当初部分の平面は、ドームを中央に配した十字形である。こちらはバラディオのヴィラ・ロトンダを思い起こさせる。正面性に配慮しながらも、建築の全体が求心的な感覚をもたらすように設計されている。

現在ほどに建物が立て込んでいない当時、開けた場所に、このような秩序を有した建築ができたことの視覚的・心理的な効果は絶大だっただろう。同世代の二人がそれぞれに留学を経て、都市の形を整えようという建築家の初心を、現存するこれらの設計に込めたことが分かる。

もう一つ、二人とも大学院では耐震構造の研究を行っていたという共通点もある。背景には1891年の濃尾地震が大きな被害をもたらしたことがある。野口孫市による中之島図書館の中央のドーム部は、二層吹き抜けの空間を覆う鉄骨構造のドームとしては国内に現存する最古のものであり(注1)、効果的な意匠は着実な技術によって裏打ちされている。

鈴木禎次も名古屋で最初の鉄筋コンクリート造の建築として1913年に共同火災名古屋支店を完成させるなど、技術面においても都市の先駆者だった。1915年に46歳でこの世を去った野口孫市が、もし本格的な鉄筋コンクリート時代を生きていたら、何を生み出したのだろうか。

(注1) 林和久「野口孫市の建築術-西洋と日本のはざまで」(創元社、2020)p.275

倉方 俊輔
大阪公立大学教授
建築史家



新しい地域会の活動として、タウンアーキテクトを目指して

愛知地域会の行政ワーキンググループ発足のキッカケは、数年前に若手会員から近年のコンペの不在やプロポーザルの参加要件のハードルについての問題提起であったと記憶しています。それを受けて建築八団体連絡会での名古屋市副市長、住宅都市局宮繕部長との意見交換会や、中部公共建築設計懇談会での小規模建築における設計入札の現状報告や愛知部会設立の提案などの活動が始まりました。私が地域会長に就任した4年前に行政WGとして活動を始めましたが、残念ながら活発に継続できず、成果はあまり上がりませんでした。コロナ禍による時代への影響なのでしょうか「今のままでは日本社会が危ない」と、変革の機運が生まれている気がします。「行政WG」の活動についてある会員に「行政関係者では設計環境は変わらないよ。トップである首長の意向が大きいから」と言われました。しかし、公共建築や街づくりを考えると、トップが熱意をもって活動する「属人的」な側面と、「組織的」な専門知識を持った人材の維持やモチベーションの継続の両立が必要であると考えます。まちづくりを続ける上で、組織のスリム化を図っている建築行政に専門家（建築家）が協働していく必要性は高まります。「協働」は建築家個人で活動するより職能団体が力を合わせて透明性を持ち公正に参加・運営していく方が好ましいと思います。また、本来私たちが向き合う「公（おおよけ）」とは「行政」ではなく「市民」ことであり「市民WG」の方が名称としてふさわしいという意見もありました。上から目線で接するのではなく建築家を様々な場面に足していただく、JIA愛知で発行している「建築家+（プラス）」の精神で、市民や行政関係者に寄り添う気持ちが大切です。

2022年4月25日には公明党愛知県本部の政経懇談会で国土交通大臣宛にコンペやプロポの設計者選定、タウンアーキテクト制度に関する要望書を提出しました。自律性のある職能団体を目指すのであれば、政治に対し

ても声を上げ、主張しなければ何も変わらないと思います。ただし、利権の維持や利益誘導のためではなく、本当に市民と一緒に建築文化を作るためです。以前は首長選挙のたびに設計入札に関するアンケートを行っていたと記憶していますが、設計者選定についての問題を知っていただく良い機会であったと思います。また、県議会議員の岡明彦氏の紹介で愛知県教育委員会、林務課、工業高校の校長会に於いてJIAのアピールさせていただき、愛知県図書館での開館30周年のイベントでは「子供建築ワークショップ一寸格子」を事業委員会で開催しました。今ではゆっくりと建築に限らず様々な行政関係者とつながりを持ち始めました。

2022年3月31日には蒲郡市長との懇談の機会をいただき、JIA愛知の活動をアピール

いたしました。「建築家の職能」をほとんどの方がご存じありませんでした。JIAの広報不足を補うためにはコンペやプロポーザルなどについてのJIA愛知のパンフレットを作成して、会員がゆかりのある自治体に飛び込む活動が必要です。その時に「建築家+」は大きな武器になると信じています。現在、蒲郡市では参加要件のハードルを下げた学校複合施設の新しいスタイルの実施設計業務プロポーザルが実施されていて、公共建築の流れは確実に変化しています。現在ではPFIやデザインビルドなど問題が生じやすい制度の普及も進みつつあり、変化はすべて好ましいものではないのです。JIAが主張をするタイミングは今ではないでしょうか？

建築家山本理顕氏の呼びかけで2021年から「東海まちづくりフォーラム」というシンポジ

公共建築の設計者選定に関する要望書

以前3Kと言われた建築現場において職人不足が叫ばれました。次に建設現場の監督が不足し、現在では設計者の不足も叫ばれています。（特に地方の小規模建築を担う設計者です）このままでは地方から創造的な仕事が減少していき、若い建築設計者のいない町になり建築行政が立ちいかなくなります。そして地方の建築文化が衰退していきます。

つきましては、上記のような状況にご認識を頂き、下記の事項に特段のご配慮を賜りますようお願い申し上げます。

記

- 一、小規模建築などの公共建築の設計者選定においては、まだまだ入札が行われています。創造的な行為である建築設計において、公募型設計競技で設計者選定を推進して頂きたいです。小規模建築の設計機会は、若い設計者の実績となり、人材育成の場としても重要です。魅力的な町づくりのために、若手の活躍する場の創造を望みます。
- 二、大規模施設などは公募型設計競技が開催されていますが問題点も指摘されています。審査の透明性、専門家（建築家、学識経験者）が関与しない審査などです。このような状況を変えて頂きたいです。
- 三、前述の課題を改善するために、（仮称）タウンアーキテクト制度などを採用して地方での建築行政を専門家（建築家）が支援する制度の設計を望みます。

以上

※日本建築家協会の正会員（建築家）は1級建築士取得後5年以上の経験を持ち、利益相反のない公正中立の立場で依頼者と社会に責任をもって業務に当たる建築家の団体です。

※【参考資料】として建築家協会会員を中心とした建築家がまとめた愛知県、名古屋市宛の提言書（4月7日付）を添付させていただきます。本来、地方自治体に提言すべきことと思いますが、国からの指導をお願いできればと存じます。

第1回東海まちづくりフォーラム 2021年8月29日(日) 13:00~16:30

ウムが4回に渡って開催されています。第1回目の基調講演では山本氏が当選されたスイス・チューリッヒ空港「THE CIRCLE」でのコンペ経験を引き合いにして、日本でのあり方について議論しました。私はこれに参加するにあたって肩書をJIA愛知前地域会長としました。山本さんからのJIAへの意見を受け止めたかったためです。実は4年前に山本さんが名古屋造形大学学長に赴任された時、歓迎パーティーの席でJIAについて厳しい意見を私に対して話されました。「僕のせいじゃない」と思いながらもお聞きしました。今回のディスカッションでは意外にもJIAへの期待を話していただき、本心では「JIA主導」でしか今の建築界の状況を変えていけないとお考えのようです。そんな中、会員である名古屋大学恒川和久氏の紹介で西尾市での設計コンペの相談がJIA愛知に持ち込まれました。西尾市の担当職員の方の熱意をうれしく思いながら、是非とも力になりたいとWGメンバーは感じました。これからこの事業は本格化していきますが「西尾市モデル」としてJIAが関係する公共建築の設計者選定のお手本となるよう進めていきます。参加要件へ「登録建築家」や「設計専攻建築士」、「CPD取得単位」を検討して、行き詰っている建築家資格制度の議論に風穴を空けていきたいです。参加要件にCPDが加味されれば研修の機会充実やバランスなどの質的向上が求められ、建築家実務訓練にもスポットが当たるかもしれません。

行政WGはZOOM主体で会議を月1回のペースで行っています。リモートのメリットを生かし、遠方の会員が参加し易くしています。今後、オブザーバーとして会員以外の若手建築家にも参加してもらえらる会議にし、このようなJIAの活動を会員以外の建築家や学生に知ってもらうことで自然と会員増強につながることを望みます。建築家が不満に思うことは当事者が団結して解決しなければいけないのに、自ら分断していく現状に一石を投じたのです。今では当たり前の「週休二日制」などの労働環境は運動によって勝ち取られたものです。行政WGの会議は「名建築の解体の



SCHEDULE 2021年8月29日(日)

大同大学 X 棟 1 階スタジオ
 YouTube Live : <https://youtu.be/VcOsIXF0MM>
 開場 13:00 開演 13:10 終了 16:30 (予定)
 ※オンライン公開討論会ですので、会場に聴講者の方は入れません。

■第一部

基調講演 13:10-13:50
 「THE CIRCLE」
 -最先端の建築とまちづくり-
 山本理顕
 建築家 名古屋造形大学学長



■第二部

オンライン公開討論会 (パネルディスカッション)
 14:00-16:30
 「名古屋市競馬場跡地再利用計画からまちづくりを考える」

パネリスト (順不同)

 恒川和久 名古屋大学大学院 工学研究科・教授	 山本理顕 建築家 名古屋造形大学学長
 武藤隆 大同大学教授	 吉元学 JIA 愛知 前地域会長
 武藤隆 大同大学教授	 米澤隆 建築家



コーディネーター
 宇野亨
 建築家
 東海圏では大小様々なまちづくりが行われています。これからのまちづくりには、立場の異なる人々が当事者意識を持って、参加できる環境が大切です。「東海まちづくりフォーラム」は、東海圏のまちづくりや建築のプロポーザルコンペ、実例について、建築関係者の垣根を越えて話し合い、みんなが共感できる新しいまちづくりの姿を創造していくオンライン公開討論の場です。オンラインで視聴者の方からのご意見・質問を受け付けながら、多角的な視点でまちづくりを捉え、活動する仲間を増やしていくプラットフォームを目指します。

主催：名古屋建築会議

危機」や「ドラゴンズで活躍する建築家2世」、「学生のアルバイトや求人情報を発信できたらい」などと行政と関係のない話題も気楽に話せる建築談義の場所です。

「タウンアーキテクト制度」とはどのようなものか、まだ確立しているものではありません。今後、行政WGで様々な専門家の意見をお聞きし、討論をしながら皆さんとJIA愛知ならではの「タウンアーキテクト制度」について作り上げていくと共に、最終的には建築士会や建築士事務所協会、建築学会などの建築他団体との連携、協働する必要性を感じています。協調型社会の日本では建築設計者の主張だけではなく利用者、発注者、施工者、運営管理者などの声を吸収する仕組みも必要になります。「タウンアーキテクト」とは地に足の着いた

建築家のウェルビーイングにつながる生き方・人生であると考えます。その範囲は建築の保存・再生、環境、建築と子供、資格制度、建築基本法などの分野に及び、広く一般社会のウェルビーイングにつながるものと考えます。以前、愛知地域会と東海支部で協働していた「JIA愛知建築セミナー」を進化させ、体系的に知識を得ながらトレーニングしていく参加型の場が今後必要になると思います。行政WGはJIA愛知の活動を横断して串刺しにしていきます。

吉元学 (JIA愛知)

愛知地域会 行政WG兼地区連絡会委員長
 ワークキューブ/愛知淑徳大学



スイスのコンペ・プロポーザル事情の紹介や 建築家が置かれた状況について

スイスでは現在、年間約400の建築コンペが開催されている。そんなスイスにおける建築コンペだが、その歴史は19世紀に遡る。1837年に設立されたスイスエンジニア・建築家協会 (Schweizerischer Ingenieur- und Architektenverein、以下、SIAと記す)は、1877年に「公共の競技会における手順の原則」というコンペに関する10の規約を発表した。内容は、コンペの手続き、陪審員、著作権、公開手続き、参加者への対価などに関するもので、それらは現在でも重要な項目である。その後も、SIAは時代ごとに変化するコンペのあり方を常に模索し、現在では、コンペに類するものとして、以下の3つの調達形態を規則で定めている。それは、ソリューション指向の競技 (Wettbewerbe、既出のコンペと区別するため、以下、競技と記す)とスタディ発注 (Studienauftrag)、そしてパフォーマンス指向のプランナー選択 (Planerwahlverfahren) である。

本来ならば各調達形態を詳述するところだが、ここでは概要のみ記す。競技には、日本の公開・指名コンペのように、公開、招待、選択という種類の手続きがある。内容は日本のコンペと似ており、対価は入賞者への賞金やプロジェクトの実現のための追加契約となる。スタディ発注は、この語意を簡潔に説明すると、主催者が参加者にプロジェクトの検討を発注するということである。基本的な取り組みは競技に類似するが、特筆すべき相違点は、手続き、非匿名、参加者への対価などである。手続きは、これまでの実績が考慮され、招待、選択で行われる。主催者が課題に対するより適したソリューションを受け取れるよう、陪審員と参加者での対話がなされるため、非匿名での実施となる。全ての参加者は対価として同額を受け取り、次のステップがある場合、最

良の作品が追加契約を結ぶ。プランナー選択は、改修やリノベーションなどの設計範囲が限られたプロジェクトに採用されるプロポーザル方式の調達形態である。手続きは、公開、選択、招待、及び直接注文である。審査は品質と価格の二封筒方式で行われ、価格に比較して品質に重きが置かれる。参加者の負担が少ないため、原則として対価はなく、最良の提案のみが報酬として契約される。なお、今年の5月にプランナー選択に関するSIA規則が改訂された際に、名称を以前のサービス提供 (Leistungsangebote) からプランナー選択に改め、その評価軸をより品質側にもってきたことは、スイスの建築に対する考え方をよく示す変化と言える。これらがスイスのコンペ・プロポーザルの主な種類・概要だが、プロジェクトによっては、異なる調達形態の組合せがあることを書き足しておく。

実例として、私が以前勤めていた会社で行ったスタディ発注の一例を紹介する。プロジェクトの場所はチューリッヒ市外の小さな街で、7つの区画で合計19,000㎡程度の敷地に集合住宅を計画するものであった。参加チームは5社。プログラムでは区画毎に容積率、建蔽率、間取りタイプや戸数、高さ関係、駐車場の数などが指定され、それに則り、建築物を設計した。契約時に石膏の敷地模型 (1:500) やデジタルデータなどを支給された。契約後の実働期間は5ヶ月程度であり、3ヵ月目に中間発表が行われ、そこでの対話によって我々は計画を白紙に戻した。その後、最終プレゼンテーションで大小9棟の集合住宅を提案した。契約金は40,000CHF (560万円程度) であった。非常にざっくりとした説明だが、スタディ発注では上記のような流れが一般的である。契約時に敷地模型が配布されるのも、周辺環境に建てられる建築の意義を重視してい

る証拠であり、畢竟建築は市民のものという考えを表している。対価に関しては、準備に要する経費や期間、またスイスの物価などを考慮すると妥当である。スイスでは労働者に対する基本的な権利が日本より認められており、勿論ある程度の振れ幅はあるが、インターンシップの月給は25万円程度、大学院修了後の初任給で60万円程度である。ただし、経験の浅い建築家やオフィスは、実績が要求されるスタディ発注もプランナー選択も難易度が高く、最初は競技 (公開手順) や直接注文からの出発となるので、決して楽な道ではないのも実情である。

このテーマに関しては、紙幅のこともあるので、これ以上記すことは出来ないが、スイスにおいて建築家が社会的に認められてきたのは、ヨーロッパという土地柄もあるが、同時に国やSIAが建築家を大切にしてきた歴史があるからだろう。プロポーザルコンペの準備資金に2~30万円しか出ないという日本の悲惨な状況に限って言えば、SIAは規則において建築家の労働に対する料金を定めている。おそらくインターンシップへの日本とスイスの待遇の違いを指摘したとしても、学生には響いても、多くの建築家には届かず、五期会の如く凍結されるだろう。しかし、例えば、建築家協会がSIAのように建築家の労働に関する基準や規則を定めることが出来れば少しは日本における建築家の立場も改善されるのではなかろうか。特に個人建築事務所にとっては難易度が高いだろうが、この変革を行うことは、日本の建築界が次のステージに行くのに必要不可欠なもののように思う。

早矢仕アレマン耕平
(JIA岐阜)

HAYASHI ALLEMANN
ARCHITECT & ASSOCIATES



わたしのとっておき 20

ぐい呑みと花入と ARCHITECT

写真は、幸兵衛窯本館建築竣工の際、加藤卓男さんから施工担当者と私にいただいた花入と建設工事中の掘削土から造られた竣工記念のぐい呑みです。

30代前半の頃で、躯体は凶面通り進めるが、その他は全て見直し、改めてデザインしながら工事を進める緊張感のある現場でした。同時に、数件の仕事を抱えていて猛烈な仕事量だった頃で、本当は、その頃の苦勞がとっておきの思い出。



形として残らないとっておきの記憶と形として残ったものに様々な想いを詰め込んだいわばアイコンですが、家族にとっては単なる木箱に入った陶器です。時々、出先で日本酒を買っては、ぐい呑みで、想いを馳せながら、悦に入っています。

ところで、愛知の役員会に出席している頃は本部・支部報告、愛知の活動について毎月話題に触れていましたが、健康上の理由もあり、役職を退いた頃からコロナ禍と重なりました。

JIAの様々な交流活動も控えられた年が続き、JIAとの距離感が遠くなり、わかりづらい状況の中で、ARCHITECTはとっておきだと思います。

毎月の発刊は厳しいとする再考の時期もありましたが、このまま継続できるように会員の一人ひとりの協力が必要と思います。また、JIA設立時からの課題に取り組む姿勢が、他団体との違いでもあるので、会員の認識が高まる企画もバランスよくこれからも続けていただくことを楽しみにしています。

高嶋 繁男 (JIA愛知)

黒川建築事務所



自作自演 250

2年生の科目「建築計画」で、商業施設と宿泊施設を2コマずつで教えている。ともに1コマ目は建築計画には触れず、各時代の中で登場してきた新業態を紹介。それが登場した時代背景を熱く語っている。(笑)

最近着目しているのは、商業施設ではネット販売と移動販売車。時代背景は「情報化×高齢化」。ブルースタジオの複

商業と宿泊の新業態

数の作品に、移動販売車の駐車スペースがセットされているのに感激した。特定の時間帯、まちは活気づく。

宿泊施設ではゲストハウスと分散型ホテル。時代背景は「空き家問題×関係人口(注)」。すっかり美濃市にある分散型ホテルのファンになった。このホテルは伝建地区に分散する古民家を改修した形態で、事業収支は低稼働率・高価格で組

まれている。そして何より、宿泊客にとっては「まちに泊まる」演出、事業者にとってはホテルの魅力づけ、ホテルで働く地元のパートさんたちにとっては雇用とちょっとした地域の誇りづくりへの参画、行政にとっては空き家問題解消や人口減少の抑制への期待など、様々な効果を生んでいる。東海地域では伊賀市の取り組みも好事例だ。

人口減少で定常的な需要が乏しくても、考え次第で事業的に成立し、まちづくりにつながる方法も色々ありそうだ。

(注) 移住した定住人口でもなく観光に来た交流人口でもない、地域と多様に関わる人々(総務省)

高井 宏之 (JIA愛知)

名城大学 理工学部 建築学科



研究室の学生と美濃商家町

※今回は執筆者の希望により東海四県近県の文化財を紹介いたします

円筒分水槽とは、農業用水などを一定の割合で正確に分配できる利水施設で全国にいくつかある。赤祖父円筒分水槽は富山県南砺市川上中にあり、小矢部川水系の赤祖父川の扇状地頂部に位置する富山県最古の円筒分水槽である。この施設ができる以前は、取水を時間割りにして用水を分配していたが、日照りが続くとう水不足により争い事が絶えなかった。現地の施設案内には傷害事件が起こったと記載されていた。

分配原理はとてもシンプルで、2つの円筒で構成されており、内側の円筒は半径3m、上にある赤祖父溜池から導水され湧き上がり縁を越流させ外側の円筒(ドーナツ状)に水が送られる。外側円筒を平



面的に見て中心点からケーキを切るように仕切板などで分割することで正確に分配できることになる。

気に平らな農地へとつながる。素朴で豊かな農村風景の維持に役立っている。

【概要】

所在地 / 富山県南砺市川上中寺山1-19他
年代 / 1949年
構造・規模 / 鉄筋コンクリート・面積29㎡
所有者 / 庄川上流用水土地改良区
登録番号 / 16-0154
指定日 / 指定日2020年4月3日
アクセス / JR城端駅から徒歩50分



出典：現地案内版より

設計は農林技師である遠藤清之輔。昭和24年完成で工事費167,000円とある。衛星地図からその位置を眺めるとミズナラの原生林を育む赤祖父山麓のヘリで一



浅井 裕雄 (JIA 愛知) 裕建築計画

編集後記

●会報・ブリテン委員会の資料の中に以前提出した編集後記の原稿が出てきた。2001年11月号に掲載

されたものである。連載テーマを提案するには様々な人との繋がりが重要なので、志のある会員はブリテン委員会に所属してくださいと呼びかけている。20年ぶりに編集委員会に出席して、執筆者を探すのに苦労をされているのは当時と変わらぬと実感いたしました。毎年公共建築の設計をするのにプロボ(簡易・提案型共)、入札に参加しています。入札においては実施される意義が問われています。プロボにおいてはいかに加点を積み上げて指名グループ(相手は不明)の中でトップに立つかが勝負となります。一スイスのコンペ・プロポーザル事情の紹介一を読んでの

感想です。スイスにおけるコンペ・プロボの内容や件数の多さには遠く及びませんが、行政ワークグループの報告にある「公共建築の設計者選定に関する要望書」は現況を変えていく上で必要な提案と考えられます。(廣瀬 高保)

●倉方氏による「大阪建築家ものがたり」は、毎回名古屋と結びつけながら、大阪建築界の話が執筆されていて大変面白い。誰と誰が先輩後輩といったルーツや繋がり、同じ設計思想の中にも味が違うあたりを理解できる幅広い文章になっている。それにしても、大阪の経済界の祖たちが、建築家をうまく育てた様子には感心させられる。早矢仕氏のスイスのコンペ・プロポーザル事情については、スイスにおいては建築家の労働に対する対価がきちんと評価されているのに対して、日本にはサービス提案的な労働が多々見受けられることに対する批判とも読めた。これらは是正

がなされれば、学生ももっと明るい気持ちで建築家への道に進んで行けるかな、などと考えるきっかけにもなった。(生田 京子)

ARCHITECT

第407号

発行日 2022.8.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込)

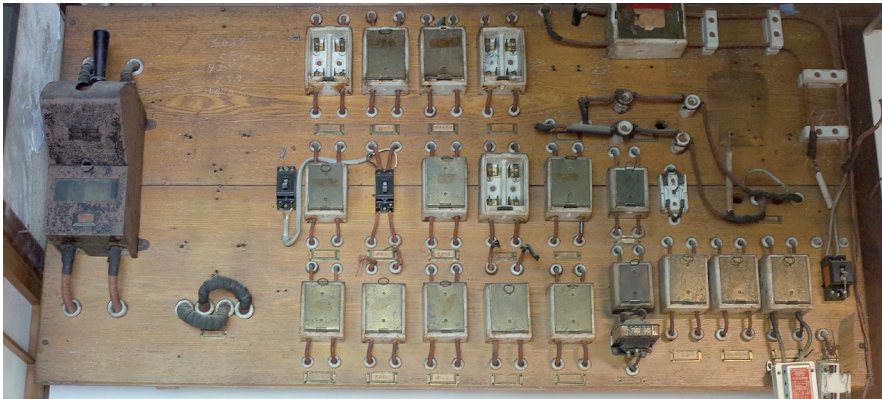
発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イツミ内
ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地
TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792
発行所 (公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル
TEL (052)263-4636 FAX 251-8495
E-Mail : shibu@jia-tokai.org
http : //www.jia-tokai.org/

聴竹居を訪ねて



去る6月18日、三重地域会主催の見学会として、藤井厚二の「聴竹居」を訪ねた。先立つこと4月に開催された地域会総会において、聴竹居倶楽部代表である松隈章先生に現地からライブ映像を交えて講演をしていただき、その際に是非今度は実物を見学したい旨を申し出たことから始まった企画である。当日は三重地域会の会員と会員外の建築家数名および建築学生の計20名で伺った。倶楽部からは松隈先生はじめ計6名の方が我々のアテンドにお越しいただき、10名づつ2班に分かれての見学となった。

「聴竹居」には本屋、閑室、茶室と三つの建物と庭園があるが、茶室と庭園は保存修理中のため見学は叶わなかった。まずは閑室、藤井厚二の書斎でありプライベートな空間として使われた建築物で、基本としての造りは茶室を模範としている。床柱、床畳、花釘、掛込天井に垂木、木舞、竿縁、違い棚、さらに躡り口（後に拡大されたい）があり、外には待合もある。ただし先述のとおり茶室は別にあるので、茶室として使用はしないが、客をもてなし、仕事や趣味に没頭し、所謂「和敬清寂」を楽しむための空間であったと推察される。さらに見ていくと、米松のフローリング（小幅だが長尺で継手がない）、土壁の上に張られたクロス（和紙）、造り付けのソファ、幾何学デザインの照明器具、玄関の腰掛など、モダンなデザインも巧みに組み込まれ、約100年前の建物であるにも関わらず、このまま快適に使える空間だと感じた。

次に本屋、まずは玄関廻りの床まで届くドアと腰で終わる袖窓の組み合わせ、欄間窓と同寸法で90度回転させたデザインが秀逸である。中に入ると空間毎に床の高さを変えてあり、意匠的な効果はもとより、その段差を利用して空気の循環を積極的に行っている。そう「聴竹居」はパッシブデザイン住宅であり、床下換気口と排気筒が要所に設けてあり、かなり通風を意識しており、極めつけにクールチューブまで存在する。また、おそらく当時としてはありえない事だと思うが、オール電化住宅であったようだ。電気冷蔵庫、電気調理器、電気ストーブを賄うための配電盤が残っており、まるで現代のビルのそれのようであった。

内装を見ていくと、垂直面においては空間の境目に存在する弧を描く開口部が印象



的である。また垂直面に比べると水平面は、床・天井ともに「線が少ない」デザインとなっており、内部空間全体としてモダンな印象をうける。開口部ではやはりサンルームが出色で、天井付近まで高さのある連窓の腰窓なのに、コーナー窓だけ垂れ壁がおりている。これが内外ともに印象深いデザインとなっている。

細部に目を向けると、藤井自身がデザインした照明器具・時計・家具には、ライトやマッキントッシュの影響を感じる部分が多々ある一方、建物全体をみても同世代であるコルビュジエの影響は僕には感じる事ができなかった。あまりに世代が近すぎ、互いが現在進行形であったが故かもしれない。

閑室、本屋ともに共通して感じたことは、違和感のなさ。現代の住宅にあるべき室、空間が全て揃っており、その当時の一般住宅をイメージしてから見ないと、「普通」に感じてしまう。まさに、そこに聴竹居と藤井厚二の凄さがあると感じた。

出口 基樹 (JIA三重)
日新設計

